

平成23年2月8日

平成22年度総研大全学教育事業実施報告書

申請区分	総研大レクチャー
プロジェクト名	日本歴史研究の方法C ―博物館とは何だろう―
申請代表者 (事業実施責任者)	研究科：文化科学研究科
	専攻：日本歴史研究専攻
	氏名：久留島 浩

■要旨

日本歴史研究の基礎的な方法を、研究博物館である国立歴史民俗博物館という場所で学ぶことのメリットを生かすために設定された3つの授業のうちの一つである。とくに「博物館とは何だろう」では、国立歴史民俗博物館における実際の展示と活動を通じて、博物館の意味と機能について学び、歴史・文化展示における表象の問題と観客とのコミュニケーションのあり方について考える。日本歴史研究専攻教員のほか、館内の博物館教育専門教員・現代展示担当教員、博物館事業担当職員にも授業に参加してもらおう。研究成果をわかりやすく専門外の人、一般の人に伝えることが大学・研究機関に求められている今日、「展示」という方法（ここでは歴史叙述の方法としての「展示」）を用いることの効果とその問題点について、実践的・具体的に考えることで、研究成果をわかりやすく伝えるとはどのようなことかについて学ぶことができる。

■事業概要

【本年度のねらいおよび具体的な実施方法】

「過去」のなかでも、体験者が生存している、あるいは身近な人々が直接に伝え聞いたことのある事柄について「展示」というかたちで表現するということは、いったいどのような意味を持ち、あるいはどのような問題性を有するのであろうか。今年3月にオープンした第6展示室（現代）はまさに、自分たちとその親、祖父母の世代が生きてきた時代であり、今年度11月にリニューアルのために閉じられる第4展示室（民俗）は、1960年代を中心に組み立てられているとするならば、時代的にはほぼ重なる。現在計画中の第4展示室の新しい展示構成は、それこそ今のわたしたちに直接問いかけてくるものはずである。展示を構築する側は、「今」あるいは今につながる「直近の過去」をどのように伝えようとするのか。それを観る側は、そこから何を読み取るべきなのか。両者の間にはどのような会話が必要なのか？

本年度は、以上のような観点から、「自分や親、祖父母が生きてきた時代」を歴史展示のなかから読み取る（自分も含めて生きてきた人々と対話する）ことができるような博物館教育プログラムを実際に各自に作成してもらおうことにした。

具体的には、ワークショップ「わたしの博物館体験」と4つの講義（「歴史展示とは何か」・「歴博の教育活動」・「教育プログラムの制作」・「現代を展示するという事」）と3つの展示解説（第1展示室＝原始・古代、第4展示室＝民俗、第6展示室＝現代）を行い、展示室でのワークシート体験を踏まえて、参加者各自に、第4・第6展示室の展示を素材とした教育プログラム（「現代」とどのように対話するか）制作を体験してもらい、それを発表し相互批判する機会を持った。

【担当教職員及び参加人数】

担当したのは、日本歴史研究専攻教員では、小島道裕（教授・中世史／博物館教育）・久留島浩（教授・近世史／博物館教育）・村木二郎（准教授・考古学）・小池淳一（准教授・民俗学）、本館の教職員では、佐藤優香（助教・博物館コミュニケーション）・原山浩介（助教・現代史）・石渡芳樹（博物館事業課資料係長）である。参加者は、日本歴史研究専攻から2名、他専攻（生命共生体化学専攻）から2名のほか、外部の博物館職員1名の計5名であった。

【成果など】

具体的な資料から展示を構成することの難しさについて、展示する側の立場から実感してもらえたようだが、同時に「展示」という表現方法の持つ特性と有効性についても理解してもらえたと思う。直接に「展示」案を考えてもらったわけではないが、来観者に展示意図を一方的に押しつけるのではなく、展示物と観客との対話をうながすようなワークシートを考案するという体験をすることで、人にもものを伝えることの難しさとともにおもしろさについても学んでもらうことができたのではないかと。しかも、歴史研究専攻だけでなく、他専攻の院生が参加することで、さまざまな分野の院生の異なる発想のしかたや見方を相互に知ることができたうえ、今年度は実際の現場で日々実践をしている博物館職員の経験を間近で聞くこともできたことは大きな収穫であった。

■今後の事業展望

博物館を持つ大学では、この授業とおなじような試みをしているところも多い。そこでは、「博物館」という空間、あるいは「展示」という表現手段が持つ意味を実践的に学ぶことで、「自ら楽しみ・学ぶ場」の持つ意味、あるいは「もの資料」と対話すること（「もの」資料が発信する情報を聞き取ったり、読み取ったりすること）や「もの」資料をはさんで他の人々と議論することの持つ意味を再認識するという効果をあげているものと思われる。とくにこれから研究に従事しようとする学生にとって、自分が行おうとしている研究がいかなる意味を持つのかについて、専門的でない他の人々に伝えることは、あらためて自分の研究を見直すよい機会になるはずである。

この点を重視して、「博物館とは何か」について考える機会を提供し続けたいと考える。同時に、歴史系博物館としては、「現代展示」を素材とした授業を進めることで、「もの」資料をはさんで「現代」と向き合うことの意味について考えてもらう機会も提供したい。

■その他

この授業に関して言うと、異分野を研究する院生たちが、同じ展示物を観て議論することの意味は重要だと考えている。

この授業には直接に関わらないかもしれないが、現在海外では、とくに「もの」にそくした日本研究をする機会が（経済力の減退を反映して）極端に少なくなっている。そのなかで、「日本研究」を志す次世代研究者と養成するためには、古文書・版本（くずし字）の解読、「もの」資料の調査などに関するワークショップが切に求められている。総研大が今後世界に向かってその存在を示すつもりがあるのであれば、海外の大学院生向けの夏期集中型ワークショップを開催して、彼らの基礎的なトレーニングをするという企画も必要ではないか。日本歴史研究専攻あるいは文学研究専攻以外の総研大院生にとっても、自らの歴史や文化を見直す貴重な機会になる可能性がある（海外に留学するときに、理科系であっても求められる教養の一つが具体的なものを通した「日本文化」への理解である）。日本歴史研究・文学研究専攻の院生にとっては、チューター的な役割を担うことで、自らの研究の意義を再確認する機会になるものと思われる。